少年の悲哀

國木田獨歩

青空文庫

少年の歓喜が詩であるならば、少年の悲哀も亦た詩である。自然の心に宿る歓喜にして若し歌ふべくんば、自然の心にさゝやく悲哀も亦た歌ふべきであらう。

兎も角、僕は僕の少年の時の悲哀の一ツを語つて見やうと思ふのである。（と一人の男が話しだした。）

＊　　＊　　＊

僕は八歳の時から十五の時まで叔父の家で生育たので、其頃、僕の父母は東京に居られたのである。

叔父の家は其土地の豪家で、山林田畑を澤山持つて、家に使ふ男女も常に七八人居たのである。

僕は僕の少年の時代を田舎で過ごさして呉れた父母の好意を感謝せざるを得ない、若し僕が八歳の時父母と共に東京に出て居たならば、僕の今日は餘程違つて居ただらうと思ふ。少くとも僕の智慧は今よりも進んで居た代りに僕の心はヲーズヲース一巻より高遠にして清新なる詩想を受用し得ることが出來なかつただらうと信ずる。

僕は野山を駈け暮らして、我幸福なる七年を送つた。叔父の家は丘の麓に在り、近郊には樹

林多く、川あり泉あり池あり、そして程遠からぬ處に瀬戸内々海の入江がある。山にも野にも林にも溪にも海にも川にも僕は不自由を爲なかつたのである。

處が十二の時と記憶する、徳二郎といふ下男が或日僕に今夜面白い處に伴れてゆくが行かぬかと誘さうた。

「何處だ」と僕は訊ねた。

「何處だと聞つしやるな。何處でも可えじや御座んせんか、徳の伴れてゆく處に面白うない處はない」と徳二郎は微笑を帶びて言つた。

此徳二郎といふ男は其頃二十五歳位、屈強な若者で、叔父の家には十一二の年から使はれて居る孤兒である。色の淺黒い、輪廓の正しい立派な男、酒を飲めば必ず歌ふ、飲ざるも亦た唄ひながら働くといふ至極元氣の可い男であつた。常も樂しさうに見えるばかりか、心事も至て正しいので孤兒には珍しいと叔父をはじめ土地の者皆に、感心せられて居たのである。

「然し叔父さんにも叔母さんにも内證ですよ」と言つて、徳二郎は唄ひながら裏山に登つてしまつた。

頃は夏の最中、月影鮮やかなる夜であつた。僕は徳二郎の後について田甫に出で、稻の香高き畔路を走つて川の堤に出た。堤は一段高く、此處に上れば廣々とした野面一面を見渡されるのである。未だ宵ながら月は高く澄んで冴えた光を野にも山にも漲ぎらし、野末には靄かゝりて夢の如く、林は煙をこめて浮ぶが如く、背の低い川楊の葉末に置く露は珠のやうに輝いて

居る。小川の末は間もなく入江、汐に滿ちふくらんで居る。船板をつぎ合はして懸けた橋の急に低くなつたやうに見ゆるのは水面の高くなつたので、川楊は半ば水に沈んで居る。

堤の上はそよ吹く風あれど、川面は漣だに立たず、澄み渡る大空の影を映して水の面は鏡のやう。徳二郎は堤を下り、橋の下に繋いである小舟の纜を解いて、ひらりと乗ると今まで靜まりかへつて居た水面が俄に波紋を起す。徳二郎は

「坊様早く早く！」と僕を促しながら櫓を立てた。

僕の飛び乗るが早いか、小舟は入江の方へと下りはじめた。

入江に近くにつれて川幅次第に廣く、月は川面に其清光を滴し、左右の堤は次第に遠ざかり、顧れば川上は既に靄にかくれて、舟は何時しか入江に入つて居るのである。

廣々した湖のやうな此入江を横ぎる舟は僕等の小舟ばかり。徳二郎は平時の朗かな聲に引きかへ此夜は小聲で唄ひながら靜かに櫓を漕いで居る。潮の退た時は沼とも思はるゝ入江が高潮と月の光とでまるで様子が變り、僕には平時見慣れた泥臭い入江のやうな氣がしなかつた。南は山影暗く倒に映り北と東の平野は月光蒼茫として何れか陸、何れか水のけじめさへつかず、小舟は西の方を指して進むのである。

西は入江の口、水狹くして深く、陸迫りて高く、此處を港に錨を下ろす船は數こそ少いが形は大きく大概は西洋形の帆前船で、出積荷は此濱で出來る食鹽、其外土地の者で朝鮮貿易に從事する者の持船も少なからず、内海を往來する和船もあり。兩岸の人家低く高く、山に據り水

に臨む其數數百戸。

入江の奥より望めば舷燈高くかゝりて星かとばかり、燈影低く映りて金蛇の如く。寂漠たる山色月影の裡に浮んで恰も畫のやうに見えるのである。

舟の進むにつれて此小な港の聲が次第に聞えだした。僕は今此港の光景を詳細しく説くことは出來ないが、其夜僕の眼に映つて今日尚ほあり〳〵と思ひ浮べることの出來る丈を言ふと、夏の夜の月明らかな晩であるから船の者は甲板に出で家の者は戸外に出で、海にのぞむ窓は悉く開かれ、燈火は風にそよげども水面は油の如く、笛を吹く者あり、歌ふものあり、三絃の音につれて笑ひどよめく聲は水に臨める青樓より起るなど、如何にも樂しさうな花やかな有樣であつたことで、然し同時に此花やかな一幅の畫圖を包む處の、寂寥たる月色山影水光を忘るゝことが出來ないのである。

帆前船の暗い影の下を潜り、德二郎は舟を薄暗い石段の下に着けた。

「お上りなさい」と德は僕を促した。堤の下で「お乘なさい」と言つたぎり彼は舟中僕に一語を交へなかつたから、僕は何の爲めに德二郎が此處に自分を伴ふたのか少しも解らない、然し言ふまゝに舟を出た。

纜を繫ぐや德二郎も續いて石段に上り、先に立つてずん〳〵登つて行く、其後から僕も無言で從つて登つた。石段は其幅半間より狹く、兩方は高い壁である。石段を登りつめると或家の中庭らしい處へ出た。四方板塀で圍まれ隅に用水桶が置いてある、板塀の一方は見越に夏蜜柑の

木らしく暗く繁つたのが其頂を出して居る、月の光はくつきりと地に印して寂とし人の氣勢もない。徳二郎は一寸立ち止まつて聽耳を立てたやうであつたが、つか〳〵と右なる方の板塀に近いて向へ押すと此處は潜内になつて居て黒い戸が音もなく開いた。見ると戸に直ぐ接して梯子段がある。戸が開くと同時に足音靜に梯子段を下りて來て、

「徳さんかえ?」と顔をのぞいたのは若い女であつた。

「待つたかね?」と徳二郎は女に言つて、更に僕の方を顧み、

「坊様を連れて來たよ」と言ひ足した。

「坊様お上んなさいナ。早くお前さんも上つて下さい、此處でぐず〳〵して居ると可けないから」と女は徳二郎を促したので、徳二郎は早くも梯子段を登りはじめ、

「坊様暗う御座いますよ」と言つたぎり、女と共に登つて了つたから僕も爲方なしに其後に從いて暗い、狹い、急な梯子段を登つた。

何ぞ知らん此家は青樓の一で、今女に導かれて入つた座敷は海に臨んだ一室、欄に凭れば港内は勿論入江の奥、野の末、さては西なる海の涯までも見渡されるのである。然し坐敷は六疊敷の、疊も古び、見るからして餘り立派な室ではなかつた。

「坊様、さア此處へ入つしやい」と女は言つて坐布團を欄の下に運び、夏橙其他の果物菓子などを僕にすゝめた。そして次の間を開けると酒肴の用意がしてある。それを運び込んで女と徳二郎は差向に坐つた。

徳二郎は平常にない懊しい顔をして居たが、女のさす盃を受けて一呼吸に呑み干し、
「愈々何日と決定つた？」と女の顔を熟と見ながら訊ねた。女は十九か二十の年頃、色青ざめて左も力なげなる様は病人ではないかと僕の疑つた位。
「明日、明後日、明々後日」と女は指を折つて、「明々後日に決定つたの。然しね、私は今になつて又氣が迷つて來たのよ」と言ひつゝ、首を垂れて居たが、そつと袖で眼を拭つた様子。其間に徳二郎は手酌で酒をグイグイ煽つて居た。
「今更如何と言つて爲方がないじやアないか。」
「それはさうだけれど——考へて見ると死んだはうが何程増しだか知れないと思つて。」
「ハツハツヽヽヽ坊様、此姉様が死ぬと言ひますが如何しましようか。——オイオイ約束の坊様を連れて來たのだ、能く見て呉れないか。」
「先刻から見て居るのよ、成程能く似て居ると思つて感心して居るのよ。」と女は言つて笑を含んで熟と僕の顔を見て居る。
「誰に似て居るのだ。」と僕は驚いて訊ねた。
「私の弟にですよ、坊様を弟に似て居るなどともつたいない事だけれど、そら、これを御覽なさい。」と女は帶の間から一枚の寫眞を出して僕に見せた。
「坊様、此姉様が其寫眞を徳に見せましたから、これは宅の坊様と少しも變らんと言ひましたら是非連れて來て呉れと頼みますから今夜坊様を連れて來たのだから、澤山御馳走を爲て貰は

んと可けませんぞ。」と徳二郎は言ひつゝも止め度なく飲んで居る。女は僕に摺寄つて、
「サア何でも御馳走しますとも、坊様何が可う御座いますか」と女は優しく言つて莞爾笑つた。
「何にもいらない」と僕は言つて横を向いた。
「それじや舟へ乗りましよう、私と舟へ乗りましよう、え、さう爲ましよう。」と言つて先に立つて出て行くから僕も言ふまゝに女の後に從いて梯子段を下りた、徳二郎は唯だ笑つて見て居るばかり。
先の石段を下りるや若き女は先僕を乗らして後、纜を解いてひらりと飛び乗り、さも輕々と櫓を操りだした。少年ながらも僕は此女の擧動に驚いた。
岸を離れて見上げると徳二郎は欄に倚つて見下ろして居た。そして内よりは燈が射し、外よりは月の光を受けて彼の姿が明白と見える。
「氣をつけないと危難いぞ！」と、徳二郎は上から言つた。
「大丈夫！」と女は下から答へて「直ぐ歸るから待て居てお呉れ。」
舟は暫時く大船小船六七艘の間を縫ふて進んで居たが間もなく廣々とした沖合に出た。月は益々冴えて秋の夜かと思はれるばかり、女は漕手を止めて僕の傍に坐つた。そして月を仰ぎ又四邊を見廻はしながら、
「坊様、あなたはお何歳？」と訊ねた。
「十二。」

「私の弟の寫眞も十二の時ですよ、今は十六……、さうだ十六だけれど十二の時に別れたぎり會はないのだから今でも坊様と同じやうな氣がするのですよ。」と言つて僕の顔を熟と見て居たが忽ち涙ぐんだ。月の光を受けて其顔は猶更蒼ざめて見えた。

「死んだの？」

「否、死んだのなら却て斷念がつきますが別れた限、如何なつたのか行方が知れないのですよ。兩親に早く死別れて唯つた二人の姉弟ですから互に力にして居たのが今では別れ〳〵になつて生死さへ分らんやうになりました。それに私も近い中朝鮮に伴れて行かれるのだから最早此世で會うことが出來るか出來ないか分りません。」と言つて涙が頰をつたうて流れるのを拭きもしないで僕の顔を見たまゝすゝり泣きに泣いた。

僕は陸の方を見ながら默つて此話を聞いて居た。家々の燈火は水に映つてきら〳〵と搖曳いで居る。櫓の音をゆるやかに軋らせながら大船の傳馬を漕で行く男は澄んだ聲で船歌を流す。僕は此時、少年心にも言ひ知れぬ悲哀を感じた。

忽ち小舟を飛ばして近いて來た者がある、德二郎であつた。

「酒を持つて來た！」と德は大聲で二三間先から言つた。

「嬉しいのねえ、今坊様に弟のことを話して泣いて居たの」と女の言ふ中德二郎の小舟は傍に來た。

「ハツハツヽヽヽ大概そんなことだらうと酒を持て來たのだ、飲みな〳〵私が歌つてやる！」

と徳二郎は既に酔つて居るらしい。女は徳二郎の渡した大コツプに、満々と酒をついで呼吸もつかずに飲んだ。

「も一ツ」と今度は徳二郎が注でやつたのを女は又もや一呼吸に飲み干して月に向て酒氣を吻と吐いた。

「サアそれで可い、これから私が歌つて聞かせる。」

「イヽエ徳さん、私は思切つて泣きたい、此處なら誰も見て居ないし聞えもしないから泣かして下さいな、思ひ切つて泣かして下さいな。」

「ハツハツヽヽヽそんなら泣きナ、坊様と二人で聞くから」と徳二郎は僕を見て笑つた。

女は突伏して大泣に泣いた。さすがに聲は立て得ないから背を波打たして苦しさうであつた。

徳二郎は急に眞面目な顔をしてこの有様を見て居たが、忽ち顔を背向け山の方を見て默つて居る、僕は暫くして

「徳、最早歸らう」と言ふや女は急に頭を上げて

「御免なさいよ、眞實に坊様は私の泣くのを見て居てもつまりません。……私坊様が來て下さつたので弟に會つたやうな氣が致しました。坊様も御達者で早く大きくなつて豪い方になるのですよ」とおろ〳〵聲で言つて「徳さん眞實に餘り遲くなるとお宅に惡いから早く坊様を連れてお歸りよ、私は今泣いたので昨日からくさ〳〵して居た胸がすいたやうだ。」

＊　＊　＊

女は僕等の舟を送つて三四町も來たが、徳二郎に叱られて漕手を止めた、其中に二艘の小舟はだん〳〵遠ざかつた。舟の別れんとする時、女は僕に向て何時までも

「私の事を忘れんで居て下さいましナ」と繰返して言つた。

其後十七年の今日まで僕は此夜の光景を明白と憶えて居て忘れやうとしても忘るゝことが出來ないのである。今も尚ほ憐れな女の顔が眼のさきにちらつく。そして其夜、淡い霞のやうに僕の心を包んだ一片の哀情は年と共に濃くなつて、今はたゞ其時の僕の心持を思ひ起してさへ堪え難い、深い、靜かな、やる瀬のない悲哀を覺えるのである。

其後徳二郎は僕の叔父の世話で立派な百姓になり今では二人の兒の父親になつて居る。流の女は朝鮮に流れ渡つて後、更に何處の涯に漂泊して其果敢ない生涯を送つて居るやら、それとも既に此世を辭して寧ろ靜肅なる死の國に赴いたことやら、僕は無論知らないし徳二郎も知らんらしい。

（明治三十五年）

青空文庫情報

底本：「日本文學全集4　國木田獨歩」新潮社
　　1964（昭和39）年4月20日発行
入力：網迫
校正：丹羽倫子
1999年2月12日公開
2004年5月26日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

少年の悲哀

國木田獨歩

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/